



「体操のまち鯖江」における体操競技振興の変遷

久保, 雄一郎

山口, 泰雄

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 10(2):63-71

(Issue Date)

2017-03-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041227>



「体操のまち鯖江」における体操競技振興の変遷

The history of gymnastic promotion in Sabae Gymnastic city

久保 雄一郎* 山口 泰雄**

Yuichiro KUBO* Yasuo YAMAGUCHI**

要約：昨今、スポーツを通じた地域活性化を目指す自治体が増え、スポーツによるまちづくりが注目されている。福井県鯖江市は、「体操のまち」を表明し市のまちづくりの施策として体操を活用している地域である。本研究は福井県鯖江市における体操競技振興の変遷に焦点を当て、「体操のまち鯖江」の形成過程を検証することを目的とした。研究方法は、福井県体操協会などの発行する記念誌など関係資料の内容分析を行い、補足として福井県体操協会役員に対する半構造化インタビューを行った。また、「体操のまち鯖江」の形成過程についてプログラム・ライフサイクル分析を実施した。主な結果として、「体操のまち鯖江」の形成過程を4つの段階（導入期、成長期、成熟期、延長期）に整理することができた。それぞれの特徴として導入期は福井県立鯖江高等学校に体操競技部の設立と設備の整備が行われ、成長期は、福井国体に向け鯖江高校体操競技部が強化指定校に選定され、体操専用の体育館の設立、世界体操選手権鯖江大会の開催など行政との協力体制が確立された。成熟期は、世界体操選手権大会の遺産の活用と強化拠点が移動した時期であり、延長期は鯖江高校へ強化拠点の復帰と指導者の世代交代を行った時期である。

キーワード：スポーツ振興、まちづくり、地域活性化、体操競技

1. はじめに

我が国のスポーツ振興政策の特徴を概観すると、1961年に「スポーツ振興法」が我が国初のスポーツ関連法として制定され、東京オリンピックの成功、国民体育大会の安定的な開催、各種スポーツ指導者の養成やスポーツ施設整備の促進など日本におけるスポーツの発展に大きく貢献した（SSF 笹川スポーツ財団, 2014）。スポーツ振興法が成立した当時の1960年代における日本のスポーツ振興は、社会体育が中心となっていた。また、1970年代の日本では、1960年代の急速な産業化・都市化によって失われた「共同体」、「人間性」の回復を図ろうとコミュニティ・スポーツ振興が行われ、余暇環境の整備を目的とした「コミュニティ・スポーツ施設」の整備がすすめられた（井上, 1974）。1980年代には日本においてスポーツの平等化と民主化を推進するものとして「みんなのスポーツ」が掲げられるようになり（佐伯, 2006）、その後1990年代前後よりスポーツ振興は、「みんなのスポーツ論」から「生涯スポーツ論」へと移行していった。1988年は「スポレク祭」や「ねんりんピック」が開催され、「生涯スポーツ元年」とも言われる（山口, 2000）。文部省（現：文部科学省）が2000年に「スポーツ振興基本計画」を策定し、その中で、生涯スポーツ振興が大きな目標とし

て掲げられた。具体的な政策目標は、全国市区町村の全てに総合型地域スポーツクラブを設立し、50%以上の国民が週1回以上のスポーツ参加を達成することを掲げた。その後も2010年にスポーツ立国戦略、2011年に「スポーツ基本法」が制定された。さらに、スポーツ基本法に基づき2012年には「スポーツ基本計画」が策定された。「スポーツ基本計画」は地方公共団体が「地方スポーツ推進計画」を定めるための指針となるように、国と地方公共団体が果たすべき役割についても留意してある（文部科学省, 2012）。

近年、スポーツ振興は地域の活性化を生み出すとされており、スポーツを通じたまちづくりの取組み事例が多く見受けられる。現在、わが国のスポーツ振興はスポーツ基本計画の下に実施されており、スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことはすべての人々の権利であるとされ、地域社会の再生、心身の健康の保持増進、社会・経済の活力等、国民生活において多面にわたる役割を担うとされている。山口（2012）によると、ハードウェア、ソフトウェア、及びヒューマンウェアの3つの側面があるスポーツ振興は、コミュニティの再生などの社会的効果、観光産業のインパクトなどの経済的効果、生活の向上などの個人的効果があるとされている。

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科

** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

(2016年9月30日 受付)
(2016年10月31日 受理)

山口ら（1996，2012）はスポーツをまちづくりの施策として掲げている「スポーツ都市」を「イベント型」、「施設・キャンプ型」、「スポーツ・リゾート型」、「スポーツ種目型」の4つに分類した。「イベント型」の取組みとして、過去に神戸市や長野市が「国際スポーツ都市宣言」を行いビッグイベントの開催により都市化を進めたものや、健康志向の高まりから市民マラソンやウォーキングイベントなどの地域イベントを行うものがある。一方で、「スポーツ種目型」として特定の競技スポーツ振興を通じたまちづくりに関する研究は、前田（1999）の樋脇町のフィールドホッケー振興に関して、住民にフィールドホッケーがどの程度浸透しているのか検証するために、チームの存在とイベントの開催に焦点を当て、歴史的経緯と現状を明らかにしている。また、山田（2009）は、浦和レッズとその本拠地であるさいたま市浦和地域（旧浦和市）を事例に、プロサッカークラブの発足に伴う「サッカーのまち」の変遷を明らかにしている。しかし、特定の競技スポーツ振興の経緯を追った研究は少ないのが現状である。特に、日本でプロスポーツチームとして存在しない競技スポーツからの地域活性化及びまちづくりを行っている事例はあまり見受けられない。

福井県鯖江市は、1995年にアジアで初めて世界体操選手権大会を開催した歴史を持ち、世界選手権開催に当たって、環境の整備やボランティアの面などを行政と市民の協力によって、大会を成功に導いた大変稀有な例である。また、現在も鯖江市政では施策の一つとして「体操のまち推進事業」を実施している（鯖江市，2016）。つまり、鯖江市は行政・競技団体・市民の連携によって体操競技の振興が進められている地域である。鯖江市の体操競技振興の経緯を研究することは、今後地方都市において、スポーツによるまちづくりを考えるうえで重要な示唆を含んでいると考えられる。よって、本研究の目的は、福井県鯖江市の体操競技振興の変遷に焦点を当て、「体操のまち鯖江」の形成過程を検証することである。

2. 研究方法

（1）調査対象

福井県鯖江市は、嶺北地区に位置する人口約7万人の小都市である。平成27年度の国勢調査において福井県内では唯一人口が増加している地域である。鯖江市は、眼鏡産業、漆器産業、繊維産業による3大地場産業を中心にしたものづくりのまちとして発展を遂げてきた。眼鏡産業は、110年以上の歴史を持ち「眼鏡フレーム」の国内製造シェアでは約9割を誇る。また、漆器産業、繊維産業においても長年培ってきた伝統や技術を有する。つまり、鯖江市は国内でも有数のものづくりの盛んな地域である。近年は、出荷額や事業所数、従業員数と縮小が続いており、現在では新たな産業としてIT産業を第4の産業に位置づけオープンデータによるITのまちづくりを行っている。

鯖江市は、市民主役を推進するために2010年に「市民主役条例」と、その一環である「提案型市民主役事業化制度」を実施しており、市民が主体的に市政に参加している町である。また、教育に関しては「全国新体力テスト」、「全国学力テスト」において小学校、中学校で全国トップレベルの福井県に属している。鯖江市には、私立の教育機関および大学機関がないことから、高校年代の

一部および高校卒業後は市外へ出る者が多く、またそのまま帰らない者も少なくない。

概観として、鯖江市はものづくりのまちとして発展を遂げてきたが、産業が低迷している中で、新たな産業としてIT産業を第4の産業に位置づけている。また、市民主役条例に代表されるように行政と市民が協力してまちづくりを行っている地域である。

（2）調査方法

本研究では、鯖江市の概要、福井県内の体操競技チーム及び体操競技イベントに関する資料分析、関係者に対する個別面接法を行った。福井県体操協会などの発行する記念誌や、体操競技関係者及び体操競技に関するイベントの情報を得た。町の概要については、鯖江市役所の職員や鯖江市長の講演などを聞き、資料を収集した。補足として、福井県立鯖江高等学校の体操競技部に出向き監督である福井県体操協会役員へ鯖江高校について半構造化インタビューを実施した。その後、日本体操協会地域担当者には福井県体操協会に出向いてインタビュー調査を行い、他の福井県体操協会員や鯖江体操スクール指導者、過去の鯖江高校のコーチ、監督や鯖江市教育委員会、スポーツ課の方とはイベント開催時に行った。

（3）分析方法

分析方法として、「体操のまち鯖江」形成過程についてプログラム・ライフサイクル分析を行った。プログラム・ライフサイクル分析とは、製品ライフサイクルから派生したもので、成長期、成熟期、そして衰退期という過程で示される人間の生物学的な成長と類似した考えから生まれたものである。図1に示すように、製品の導入から終了までを人間の誕生から成長、老化までを提示したライフサイクル論をベースとし、プログラムがどの程度支持されているか通常5つのライフサイクルから構成している（クロンプトン・ラムら，1991）。縦軸はプログラムの参加者数を、横軸は時間の経過を示している。第一段階の導入期では、顧客の支持は低い。第二段階の成長期で、参加者数が急速に増加し、第三段階の成長期では、参加者数は伸び続けるものの、そのスピードは鈍り始める。第四段階の成熟期においては、成長は見られず、顧客の支持も衰え始める。そして、最終的に衰退期に入り、プログラムは消滅するか、市場における受け入れが大幅に減少しそのまま長期にわたって存続する化石化が起きる。しかし、衰退期の初期において、プログラムをリニューアルすることで、新たに成長することが可能であり、その結果プログラムの寿命が伸びることになる（延長）（山口，2010）。また、プログラム・ライフサイクルはそれぞれのプログラムに固有の成長曲線が存在しており、多様な経過が想定される。

ライフサイクル分析を用いた研究には、アメリカ貿易にライフサイクルを当てはめた国際貿易論についての研究（ウェルズ，1976）やプログラムのライフサイクル段階に応じて管理経営者の能力の適正を分析した人的資源管理の研究（Crompton, et, al., 1978）などがある。また、Crompton, et, al. (1976) は、従来の民間機関の製品に対するライフサイクルの成長曲線を整理・分類したうえで、公共機関の提供するサービスを対象にライフサイクル分析を

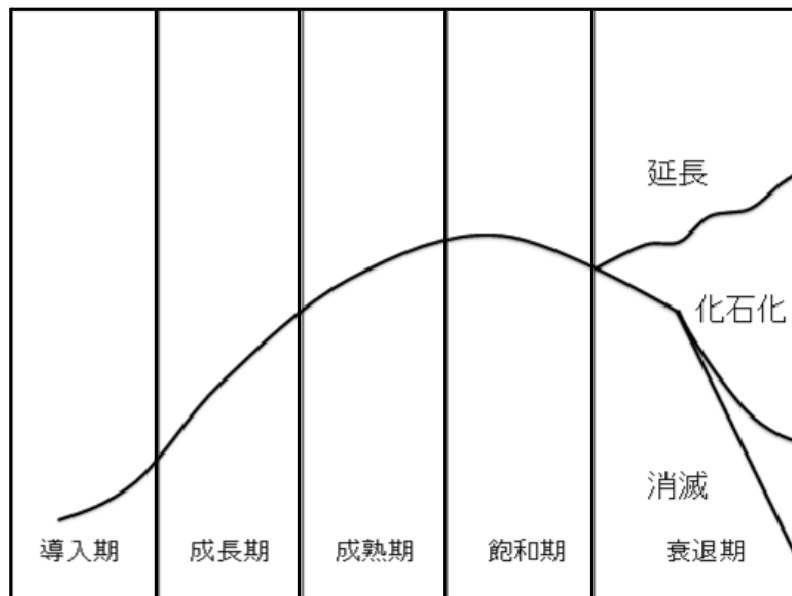


図1・プログラム・ライフサイクル分析（山口，2010）

実施した。具体的には、米国の30都市における公共機関が提供する公園・レクリエーション・サービスに、製品ライフサイクル分析を応用し、6つのタイプの成長曲線に分類した。クロンプトンら（1991）の研究では、プログラム・ライフサイクル分析の適用が、公共レクリエーションから、政府・社会サービスへの応用も図られ、公共機関や非営利団体などのソーシャルマーケティングにも応用されている。プログラム・ライフサイクル分析のスポーツ振興への応用として、高松ら（2013）は、奈良県の総合型地域スポーツクラブの設立数に関して、プログラム・ライフサイクル分析を用いて、奈良県の総合型地域スポーツクラブ育成事業の現状を把握している。

本研究では、「体操のまち鯖江」の形成過程についてプログラム・ライフサイクル分析を用いて検証する。縦軸は鯖江市における体操競技振興に対する支援を表す。具体的には行政機関である福井県及び鯖江市からの体操競技振興に向けた施策・事業の支援を表している。横軸は時間経過を示すものとする。本研究においてプログラム・ライフサイクル分析を用いる利点は2つある。1つ目は、世界体操選手権鯖江大会開催を基点とし、鯖江市における体操競技に関する施策・事業を導入期から成長期で整理ができることである。また、2つ目は、新たな体操競技指導者を導入し世代交代を行ったことをプログラムのリニューアルと捉え、成熟期より後を延長期として整理できることである。

3. 結果及び考察

「体操のまち鯖江」として現在に至るまでの経緯についてプログラム・ライフサイクル分析を行った結果、以下のことが明らかになった。「体操のまち鯖江」の形成過程は、導入期（1948～1965年）、成長期（1966～1995年）、成熟期（1996～2004年）、延長期（2005～現在）の4つの段階に分類することができた。成熟期以降も、新たな指導者が導入されるなどプログラムの修正がなされ、今尚発展を続けていることから成熟期より後を延長期と分類した。表1は、福井県における体操競技大会・演技会開催の年表である。導入期では、全国大会や日本代表選手の演技会は鯖江市では開催

されていない。しかし、成長期、成熟期そして延長期では、行政の協力のもと鯖江市で多くの体操競技大会や演技会が開催されている。

（1）導入期（1948～1965）

導入期は、1948年の福井県体操連盟の設立から国民体育大会福井大会（以下：福井国体）の開催へ向けた鯖江市の取組みが始まる1965年までの期間である。1948年に中等学校から高等学校への学制改革により全国高等学校体育連盟（以下：全国高体連）が創設された。同年に福井県内でも高体連の誕生と同時に体操などを含む11競技種目の専門部が設立され、組織化が行われた。当時体操部は県内に数校しかなく体操競技の専門部担当校は福井県立三国高等学校（現：坂井市）となり、福井県の体操競技の中心となる。1952年には福井県立鯖江高等学校（以下：鯖江高校）に体操部が設立されるなど1950年代前半には多くの高等学校で体操部が設立された。

1949年に開催された第3回国民体育大会に福井県は、体操競技種目にも参加するものの、県内の高校につり輪や平行棒がないこともあり、全国との競技力の差が歴然となった。そのため、翌年に福井県内で初の平行棒が三国高校に設置され、各校にも吊り輪が設置されていった。しかし、その後も鞍馬は県内に一台しかなく、当時の鞍馬の成績はほかの種目に比べて全国的に低いものであった。その後も、1959年に福井市体育館が建設されるまで、県下に体操器具が完備された施設はなかった。

1958年頃から福井県で全国国民体育大会（以下：国体）の招致活動が積極的に行われるようになる。第1回国体の開催以降、国体は戦後復興を象徴するものであったが、各県のスポーツ振興の現状を表すことにもなっていた。福井県の成績は全国最下位グループにあり、初回からの劣勢が続いていたことから、現状の抜本的な改革の手段として、「スポーツ水準の高揚と県政の発展」のために国体の招致活動が始められた。

1960年開催の第12回国民体育大会から、福井国体開催を見据えて、地方競技団体の組織力強化と大会運営の向上、競技力の強化

表 1・福井県における体操競技大会・演技会年表

(本研究の調査にあたり、収集した資料をもとに筆者作成)

年度	大会・演技会名	場所	イベント の 種 類	競技対象者	参加人数	分類
1964	全国高等学校総合体育大会福井大会	武生市各体育館	全国大会	高校生	男女：131人	導入期
1968	武生市英体育館建設記念 メキシコオリンピック候補体操選手 公開演技会	武生市市営体育館	演技会	日本代表候補選手	男子：11人 女子：11人	成長期
	第23回国民体育大会	武生市市営体育館	全国大会	県代表選手	男子：245人 女子：275人	
1972	全日本学生体操競技選手大会	福井市体育館	全国大会	大学生	男女：378人	
1974	日独対抗体操競技演技会	武生市市営体育館	演技会	日独代表選手	男女：35人	
1974	日米対抗高校女子武生大会	武生市市営体育館	交流戦	米国ジュニア代表 鯖江・武生の高校生	女子：15人	
1975	第5回全日本ジュニア体操競技選手 権武生大会	武生市市営体育館	全国大会	大学2年生以下	男子：34人 女子：29人	
1976	第7回全国中学校体操競技選手権大会	鯖江市総合体育館	全国大会	中学生	男女：131人	
	国際選抜体操競技鯖江演技大会	鯖江市総合体育館	演技会	各国代表選手	男子：11人 女子：8人	
1980	NHK杯第22回オリンピックモスク ワ大会 日本代表決定競技会	福井県営体育館	全国大会	日本代表候補選手	男子：18人 女子：24人	
	80国際選抜体操競技鯖江演技大会	鯖江市総合体育館	演技会	各国代表選手	男女：27人	
1983	鯖江市立待体育館落成記念 日中友好体操競技演技会	鯖江市立待体育館	演技会	日・中代表選手	男子：6人 女子：6人	
1984	日中友好体操競技模範演技会	鯖江市立待体育館	演技会	日・中代表選手	男子：12人 女子：13人	
1985	鯖江市制30周年記念事業 オリンピック・世界選手権日本代表 選手体操競技模範演技会	鯖江市総合体育館	演技会	日本代表選手	男女：17人	
1986	日中友好体操競技模範演技会	鯖江市総合体育館	演技会	地元選手・北京市 選手	男子：11人 女子：10人	
1988	第27回 NHK杯体操競技選手権大会 兼第24回オリンピックソウル大会 日本代表選手決定競技会	鯖江市総合体育館	全国大会	日本代表候補選手	男子：20人 女子：24人	
1989	第22回全日本社会人体操競技選手権 大会	鯖江市総合体育館	全国大会	一般	男子：171人 女子：23人	
1991	第8回全国高等学校体操競技選抜大会	鯖江市総合体育館	全国大会	高校生	男子：36人 女子：36人	
1992	95世界体操競技選手権招待記念 92中日国際体操競技鯖江演技大会	鯖江市総合体育館	演技会	各国代表選手	男子：16人 女子：19人	
1993	93国際ジュニア体操競技選手権鯖江 大会	鯖江市総合体育館	世界大会	各国代表ジュニア	男子：17人 女子：19人	成熟期
1995	1995年世界体操競技選手権鯖江大会	サンドーム福井	世界大会	各国代表選手	男子：214人 女子：200人	
1996	ピタリフェスタ96 スポーツフェスタ 体操競技会	サンドーム福井	演技会	日本代表選手・地 元選手	男子：12人 (地元選手4人) 女子：15人 (地元選手7人)	
1997	ピタリカップ体操国際選抜体操競技 大会	サンドーム福井	世界大会	各国代表選手	男子：12人 女子：11人	
1998	1998年体操競技ワールドカップ決勝 鯖江大会	サンドーム福井	世界大会	各国代表選手	男子：26人 女子：13人	
1999	平成11年度 全国中学校体育大会 第30回記念 全国中学校体操競技選 手権大会	サンドーム福井	全国大会	中学生	男子：107人 女子：107人	
2000	鯖江市制45周年記念 2000全日本社会 人体操選手権大会 第33回全日本社会人体操競技選手権 大会	鯖江市総合体育館	全国大会	一般	男子：258人 女子：53人	
2004	福井テレビ開局35周年記念 アテネオリンピック体操選手団金メ ダル凱旋演技会	鯖江市総合体育館	演技会	日本代表選手・地 元選手	男子：14人 (地元選手8人) 女子：7人 (地元選手5人)	延長期
2005	鯖江市制50周年記念大会 1995年世界体操競技選手権鯖江大会 10周年記念大会	サンドーム福井	全国大会	日本代表候補選手	男子：18人 女子：24人	
2008	第40回全日本社会人体操競技選手権 大会	鯖江市総合体育館	全国大会	一般	男子：368人 女子：77人	
2009	第41回全日本社会人体操競技選手権 大会	鯖江市総合体育館	全国大会	一般	男子：373人 女子：86人	
2010	西日本ジュニア体操競技選手権大会	鯖江市総合体育館	西日本大会	中学生以下	男子：324人 女子：328人	
2012	全国高校総体	サンドーム福井	全国大会	高校生	男子：266人 女子：242人	
2013	第8回全国ブロック選抜U-12体操 競技選手権大会	鯖江市総合体育館	全国大会	小学生	男子：96人 女子：96人	
2015	全日本シニア大会 (体操競技男女)	鯖江市総合体育館	全国大会	一般	男子：341人 女子：109人	
2016	第70回全日本学生体操競技選手権大会	サンドーム福井	全国大会	大学生	男子：227人 女子：164人	
	第47回全国中学校体育大会	サンドーム福井	全国大会	中学生	男子：111人 女子：111人	
2018	第8回国民体育大会福井大会 (体操 競技)	サンドーム福井	全国大会	県代表選手		

を意図して各地域で分散開催されることとなった。第12回大会から第14回大会まで鯖江市でも体操競技種目の大会が開催された。1961年の第13回県民体育大会では、鯖江高校が体操競技女子の部で初の個人総合優勝選手を輩出する。さらに、翌年の1962年開催の第14回県民体育大会、体操競技女子の部で、鯖江高校が初の団体総合優勝と個人総合に優勝を果たした。その後も、1965年の第17回県民選手権大会まで、体操競技女子の部では鯖江高校が4年連続で団体総合優勝を成し遂げる。

一方で、1964年東京オリンピック開催の年に福井国体開催が内定し、県内ではスポーツに対する関心が高まる時期となった。また同年には県内で初めて開催される体操競技の全国大会として全国高等学校総合体育大会（以下：高校総体）体操競技選手権大会が武生市（現：越前市）で開催された。この頃には、体操競技専門部が三国高校から福井県立武生高校（現：越前市）へと移り、福井県の体操競技の中心も移動していた。

導入期は、「体操のまち鯖江」の形成過程において、主にハード面のスポーツ振興が行われた時期といえる。福井県全体では、福井県高体連の設立とともに、福井県体操協会の組織化がなされた。1952年には鯖江高校体操競技部が設立され、競技に必要な施設、設備が拡充され、県民体育大会では鯖江高校の優勝など県内での鯖江高校体操競技部の活躍が見え始めた。導入期は「体操のまち鯖江」の形成における基盤が形成された時期であったといえる。

（２）成長期（1966～1995）

成長期は、1966年に鯖江高校の男女体操競技部が強化指定校に選定されてから、1995年の世界体操競技選手権鯖江大会（以下：世界選手権）の開催までの期間である。福井国体の開催が決定し、県内各市町村での競技が開催されることとなると、よい成績をあげることが各市町村開催の意義であり使命となった。体操競技に関しては武生市体育館（現：越前市）で開催されることが決定した。短期間で成果を上げるために福井県体操協会が主導となり行政と協力し、強化指定校を選定し選手と教員として採用した指導者・監督をそれぞれに配置し選手の育成を行った。強化指定校には、鯖江高校男女体操競技部、さらに一つランクが上の超重点強化校として武生高等学校定時制（以下：武生高校定時制）の女子体操部が選ばれた。武生高校では福井国体が開催されることが決まると選手強化を行うため福井県内の有力な選手を同校の定時制に入学させ、県費で最新式の器具を導入し、選手強化に努めた。

このような福井国体へ向けた強化施策の成果が見え始めたのは、1967年に武生高校定時制女子体操競技部が全国高校総体（新潟インターハイ）で初の団体総合優勝を果たしたことである。続く翌年の広島インターハイでの女子体操競技では、前年度の優勝校枠として武生高校定時制と福井県代表枠として鯖江高校の両行が出場し、武生高校の連覇と鯖江高校が2位となり、上位2校を福井県勢が占める偉業を成し遂げた。また、選手強化の成果としては、高校生としてはじめてのオリンピック選手を輩出するなど日本トップクラスの選手を輩出するまでに至っていた。この時期辺りからメディアなどで「体操王国福井」と言われるようになった。

そして、第23回福井国体では、個人総合女子では1～3位までを独占し、団体でも高校女子1位を筆頭に一般男子3位、高校男

子4位、一般女子4位を獲得し地元国体での総合優勝に大きく貢献した。国体を契機に、県における体育スポーツに対する関心はかつてない高まりを見せ、「スポーツ水準の高揚と県政の発展」という当初の目的は見事に成し遂げられたといえる。また鯖江市においてもスポーツ熱が高まり、鯖江市体育協会の組織強化、各種運動施設の整備が行われ、市制20周年記念事業として1975年鯖江市総合体育館が建設され、立待地区と神明地区、鯖江地区に鯖江体操クラブが設立されるなどした。

福井国体後に他の競技団体の競技力が低下していく中、体操競技に関しては競技力が維持されており、特に女子においては全国でも上位の成績を残すことができていた。これは、福井県体操協会がジュニア層の育成強化に力を注いだ結果といえる。福井国体開催を契機に国体終了後も行政からの支援を受けながら、地域と密着した大会や演技会の誘致を進めていき、選手強化を推進していった。この頃の競技成績として、1979年に宮崎国体での少女女子、成年女子のアベック優勝など全国に突出した輝かしい成績を残している。

しかし、国体後も競技力を維持し続けてきた体操競技であったが、競技力の維持にも限界が訪れる。鯖江高校のライバルとして福井県の女子体操競技を共に支えてきた武生高校定時制の部員不足による廃部によって、1982年から鯖江高校が福井県女子強化を一身に背負うこととなる。

1983年にジュニア育成のために行政に懇願していた体操専用の体育館である鯖江市立待体育館（以下：立待体育館）が完成した。同時期に、体操競技専門部も武生高校から鯖江高校に移動し、福井県の体操競技の中心が鯖江に完全に移行した。立待体育館では小学校から高校生までが一堂に会し練習を行えるようになった。さらに立待体育館の建設を契機に鯖江体操スクールが開設され、第1回福井県学童体操競技大会が開催されるようになり、より一層のジュニア選手の強化と競技人口の拡大が行われた。さらに立待体育館が建設されたことで、国内外の代表選手団による強化合宿が行われるようになった。特に中国との友好的なスポーツ交流事業は、メガネ産地鯖江市が中国北京市と交流を始めて4年目になるメガネ外交から発展したものである。当時、世界の体操をリードする日中の一流選手を集めた中国北京市体操選手団合宿兼交歓演技会を鯖江市で開催したり、体操施設や練習状況の視察のために北京市に赴いたりするなど交流を行っていた。また鯖江体操スクールのコーチとして、中国の代表選手を多数育て上げてきた実績を持つ北京市男女体操指導者を招待するなど国際交流が行われた。

1985年にメガネ産業最大手の石山眼鏡株式会社に社会人体操部クラブが誕生した。設立の翌年、全日本社会人大会2部で団体優勝を皮切りに、その後は全日本社会人大会1部に出場した。石山眼鏡体操クラブは1部でも団体準優勝を飾るなど素晴らしい成績を修めていた。しかし、1993年に経済環境悪化のために石山眼鏡クラブは休部となってしまった。

福井県では国体の全体的な成績不振を打開するために、1986年に県立高校普通科にスポーツ推薦制度が確立された。その結果、中学生の段階から才能を発掘・育成し、高校へとつなぐことで選手の安定した獲得が可能になった。鯖江高校男女体操部にもこの

制度が適用され、立待体育館を起点に小学校で鯖江体操スクールに所属し、鯖江市立中央中学校そして、鯖江高等学校の体操部に入るという一貫指導体制が確立された。

1988年には、鯖江市の協力のもと数多くの大会や演技会が行われてきた実績や日本体操協会との強いつながりを持っていた福井県体操協会役員が日本初の世界体操選手権大会を鯖江市で開催しよう交渉を始めた。しかし、世界選手権開催にあたり、1万人以上の観客を収容できる競技場の建設、メイン競技場と同じ器具を揃えた8カ所の練習場、選手、役員が競技場まで25分以内で移動できる宿舎などの条件が提示され、当時の現状から国際大会の開催は難しい状況であった。過去の世界体操選手権大会の開催地は、国を代表するような大都市での開催であり、まだアジアでの大会開催もなされていないような状況であった。しかし、1990年11月に世界体操連盟の総会で鯖江市が唯一の立候補地となり、世界体操選手権大会の鯖江市での開催が確定された。世界選手権を開催するためのメイン会場であるサンドーム福井を鯖江市と越前市の県境に建設するなどハード面の課題解決に取り組んだ。同時に、地域住民の体操への関心を高めるために、福井県体操協会は世界選手権を誘致し始めた頃から、世界体操選手権開催までの期間に国際大会から全国大会まで、毎年、大きなイベントを鯖江市で開催した。

世界体操選手権は、56の国・地域から選手団総数892人が参加した。運営にかかわった係員は約1万人、うち400人は全国から集まった体操関係者であり、総入場者数108,035人であった。また、当時ボランティアが定着していない中、通訳ボランティア750人、一般ボランティア3,106人と多くのボランティアによって大会運営が行われた。この大会の特徴は、オリンピック100周年記念大会であるアトランタオリンピックの予選を兼ねた大会となっていたことである。また、世界大会では初めて地域住民との交流事業として1市町村1ヶ国交流事業が県内各地で行われ、鯖江市では公民館単位の11地区で21ヶ国を担当した。

成長期は、「体操のまち鯖江」において、福井国体の開催決定を契機に行政との連携による体操競技振興が行われた。競技選手や指導者、設備などの資源を強化指定校の鯖江高校に集めることで、効率的に選手強化が行われた。その後も、行政からの支援による立待体育館の建設や公立高校へのスポーツ推薦制度の確立、世界体操選手権の開催などによって体操競技振興が行われた。立待体育館が完成したことでジュニア育成に大きく貢献し、その後の鯖江市の体操の競技力を支えた。さらに、優れた体操競技専用の競技施設が建設されたことで、体操競技選手団の合宿や演技会など様々なイベントを開催し、国内・外からナショナル・チームを鯖江市に招くことが可能になった。特に大会開催に関しては、市政誕生の5周年ごとに記念大会を開催するなど鯖江市は体操競技の大会などイベント開催に大変協力的であった。世界体操選手権開催に当たっても、行政がサンドーム福井の建設や国道の整備などのハード面を支えた。また、当時ボランティアがまだ一般的なものとなっていない中、多くの鯖江市民がボランティアとして大会を支え、「支えるスポーツ」としての体操競技振興も行われた。つまり、行政、市民、競技団体の協力によって、小都市でありながらも世界レベルの大会やイベントを開催、運営することができた

といえる。その結果として、鯖江市は「体操のまち鯖江」として日本及び世界の体操界における地位を確立していくことができた。

（３）成熟期（1996～2004）

成熟期は、1996年世界選手権大会終了後から2004年までの期間である。大会終了後も1995年世界選手権鯖江大会の遺産である施設環境や市民運動を活かし、多くの大会や演技会が開催された。世界体操選手権開催1周年を記念してアトランタ五輪選手を招いたピタリフェスタ体操演技会を中心に産業まつりや国際フェスティバルなどが行われた。この体操演技会には約8,000人の観客が詰め寄せ立ち見客が出るほどだった。1997年にピタリカップ鯖江国際選抜体操競技大会が開催され、1998年の体操競技ワールドカップ決勝鯖江大会では1995年世界体操選手権鯖江大会が国際的に評価されたことから、サンドーム福井で開催された。その後も1999年全国中学校体操競技選手権大会、2000年第33回全日本社会人体操競技選手権大会が開催されるなど、世界体操選手権大会後、5年連続で全国・世界レベルの大会が鯖江市で開催された。この時期の競技成績としては、全国中学校体育大会では男子の部で2000、2001年と2年連続団体3位や種目別での優勝など全国レベルの活躍がみられた。

また、この時期の特徴として、福井国体以来の体操競技の強化指定校であった鯖江高校から強化拠点が鯖江市外の他校に移行した。1996年鯖江体操スクール生の所属する私立北陸高校（福井市）が女子体操競技のインターハイで全国制覇を成し遂げた。その後も2000年まで鯖江高校から北陸高校へと女子体操競技の強化拠点が移り、男子でも、同様に2002年から2004年まで体操競技の強化拠点が鯖江高校から北陸高校に移行した。ただ、北陸高校に強化拠点が移動した際も、選手は鯖江体操スクール所属であった。鯖江高校からの強化拠点の移動は、女子の場合は中国からの留学生選手がいた経緯があり、言語などの問題で公立高校での受け入れが難しいことから私立高校である北陸高校に強化拠点を移動させた。一方で、男子の場合は、鯖江高校の学校方針と福井県体操協会との意向の違いなどから、よりよい環境を求めた結果としての強化拠点の移行が行われた。

成熟期は、競技設備などのハード面、市民の体操への関心などのソフト面など世界選手権の遺産を活かした体操競技振興が行われ、「体操のまち鯖江」を維持していた時期であったといえる。この時期には、福井国体以来体操競技を支えてきた指導者などの高齢化が心配され、世界選手権後の衰退が懸念された時期でもあった。特に小都市である鯖江市にとっては、新たな指導者など人材面での不安があったと考えられる。

（４）延長期（2005～現在）

延長期は、体操競技の強化拠点が鯖江高校に復帰した2005年から現在に至るまでである。一時、体操競技の強化拠点が鯖江高校から他校に移動する時期もあったが、2005年に鯖江高校男子体操競技部監督の世代交代とともに強化拠点が鯖江高校に復帰した。鯖江高校への強化拠点の復帰は鯖江市政などの行政機関や鯖江高校の卒業生などの声が多くあったことも影響している。またこの時期は、指導者の高齢化に対して、鯖江市出身者を含む国内や中

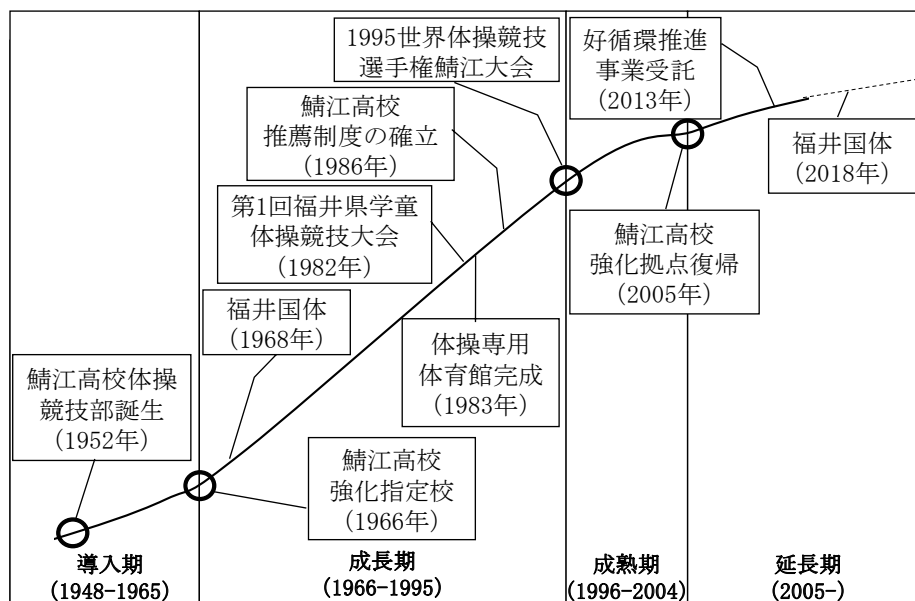


図2・「体操のまち鯖江」におけるプログラム・ライフサイクル分析

(本研究の調査にあたり、収集した資料をもとに筆者作成)

国など交流のあった国外からも優秀な指導者を招聘し指導者の補強を行い、世代交代が行われた。その結果、男子体操競技部においては2007年高校総体では鯖江高校男子体操部が39年ぶりの4位入賞を果たし、2010年にはついに鯖江高校男子体操部が全国高校総体団体初優勝を成し遂げた。公立高等学校が団体の優勝することは、33年ぶりの快挙であり、同時に鯖江高校女子体操部は入賞を果たしている。

昨今の鯖江市の体操競技に関する取組みとしては2011年世界体操選手権東京大会の際にカナダチームが鯖江市での合宿を行っている。また特徴的な取組みとして、2013年度より文部科学省の施策である「トップスポーツと地域スポーツの好循環推進プロジェクト（以下：好循環プロジェクト）」が行われている。2000年に総合型地域スポーツクラブとして設立されたNPO法人さばえスポーツクラブが、文部科学省からの委託を受け実施している事業であり、小学校体育指導の支援などを行っている。NPO法人さばえスポーツクラブから依頼を受け、鯖江体操スクールの指導員が鯖江市内の各小学校に派遣され、学校体育における器械運動の授業を行っている。また、文部科学省からの委託期間は2013年から2015年までの3年間であったが、その後も鯖江市の助成によって同様の事業が行われている。

2015年に市制60周年記念大会を開催し、2016年の第70回全日本学生体操競技選手権大会、第47回全国中学校体育大会はサンドーム福井にて開催された。2018年には二巡目福井国体の開催が決定しており、体操競技のメイン会場はサンドーム福井となっている。また、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の事前キャンプ地として、中国の体操競技選手団の受け入れに向け行政と競技団体が協力し取組んでいる。

延長期は、「体操のまち鯖江」の形成においてリニューアルの時期であった。成熟期に懸念されていた指導者の高齢化に対して、国内、外から優秀な指導者を確保し、世代交代を行いヒューマンウェアからの体操競技振興を行った。その結果、鯖江高校男子体操部の活躍が現在の鯖江市の体操競技を担っているといえる。ま

た、好循環プロジェクトでは、「するスポーツ」としての体操競技振興を通して「体操のまち鯖江」の形成に貢献することが期待されている。

4. まとめ

本研究の目的は、福井県鯖江市の体操競技振興の変遷に焦点を当て、「体操のまち鯖江」の形成過程を検証することであった。プログラム・ライフサイクル分析を用いて、「体操のまち鯖江」の形成過程を4つの段階に分類した。「体操のまち鯖江」におけるプログラム・ライフサイクル分析の成長曲線とそれぞれの分岐点に関わる出来事を図2に表した。

- ・導入期は、鯖江高校に体操部が設立され、体操競技設備などの導入が行われた。
- ・成長期は、国体の開催決定により鯖江高校が強化指定校に選定され、福井県体操協会と行政との協力によって選手や指導者、設備などの資源が集中し、効率的に選手強化が行われるようになった。さらに、行政からの支援により体操専用体育館の建設やスポーツ推薦制度の設立、世界体操競技選手権鯖江大会の開催による体操競技振興が行われた。
- ・成熟期は、世界選手権大会開催を受け継ぎ、多くの大会を誘致、開催したが、その一方で強化拠点の移動や世代交代などの将来的不安要素もあった。
- ・延長期は、鯖江高校に強化拠点の復帰と福井国体時に補強した指導者など体操競技関係者の高齢化に対して、若い指導者を導入し世代交代を行った結果、鯖江高校男子体操競技部の躍進が続いている。

5. 結論と今後の課題

現在、男子高校体操競技においては大阪府、千葉県、岡山県、そして福井県の4強の時代と言われている。福井県鯖江市は人口約7万人という小都市であり、他の地域と比べると10分の1にも満たない人口の都市である。このような都市で日本トップクラス

の選手を育成できているのは、鯖江市政との協働・連携が大きな力となっている。スポーツ基本計画における「施策の総合的かつ計画的な推進のために必要な事項」にも、関係者の連携・協働による計画的・一体的推進の必要性が述べられている。スポーツの推進には、多様な主体による連携・協働が必要不可欠であるとされ、スポーツ団体等の主体的な連携・協働と地方公共団体においても、首長部局や教育委員会等スポーツを所管する組織間の連携の強化が期待されている（文部科学省，2012）。現在の「体操のまち鯖江」は、福井国体開催に伴う強化指定校や推薦入学制度などの制度面の確立、立待体育館やサンドーム福井などの競技施設の設定、そして、世界選手権に代表される大会やイベントの開催など各行政機関との連携・協働によって確立されている。また、行政の協力を得るには市民の理解が必要になるが、鯖江市では、大会での好成績や市民を巻き込んだ大会運営などが行われたことで、市民からの理解が得られている。さらに、フィールドワークを行う中で、体操競技指導者は選手に対する指導を行うだけでなく、大会の運営なども行い、「体操のまち鯖江」を支えている。このように、鯖江市に体操競技の資源を集中させ、行政・市民など多くの関係者を巻き込みながら、競技活動を推進してきたことが現在の体操のまち鯖江を作り上げたと言える。

最後に、「体操のまち鯖江」を発展させるために以下2点のインプリケーションを行うことができる。第1点目に、高校卒業後も鯖江市で競技選手活動が続けられるように環境を作ることである。鯖江市の特徴の一つとして大学機関がないこと、社会人体操部を抱えることのできる企業がないため、高校卒業後に体操競技活動を続けるためには市外に出なければならない。そのため、鯖江市出身の体操競技選手が活躍していても鯖江市の選手とは認識されにくく、所属チームである、例えば、日本体育大学体操競技部の選手あるいはコナミスポーツクラブ体操競技部の選手として認知される。体操競技関係者以外の一般の人にとっては「体操のまち鯖江」としては、認知されにくいのが現状である。鯖江市政及び鯖江市内の企業など鯖江市全体で体操競技チームを持つことができれば、「体操のまち鯖江」としてさらなる発展が望めると考えられる。

第2点目に、若い世代に対して体操競技の関心を高めていくことである。「体操のまち鯖江」として最も盛り上がりを見せた世界体操選手権大会開催から20年以上が経過し、若い世代は福井県及び鯖江市を挙げての体操競技に関するイベントを行った経験がない。確かに、30代以上の世代は世界体操選手権の開催を経験しており、「体操のまち鯖江」としての認識もあると思われる。しかし、若者世代にとっては人伝に当時の話を聞くことや競技施設であるサンドーム福井を見ることでしか、過去の世界選手権の開催を認識することができない。「体操のまち鯖江」は市民の体操競技に関する関心や理解によって成り立っており、若い世代を巻き込んでいくことが今後、重要になるといえる。幸いにして、2018年開催の福井国体では体操競技種目は鯖江市で開催されることが決定している。この国体に多くの市民の力を借りながら成功させることで、「体操のまち鯖江」としてのさらなる発展が見込める。そのために、文化プログラムや第2巡目福井国体開催記念イベントなどを通じて、国体のムーブメントを高めていくことが望まれる。

6. 引用・参考文献

- 井上孝男（1974）「コミュニティ・スポーツ振興のために」，*体育の科学*，24：624－627。
- 公益財団法人福井県体育協会（1992）「福井県体育史第二巻」。
- 公益財団法人福井県高等学校体育連盟（1998）「高体連創立50周年記念誌」。
- 公益財団法人福井県体操協会（2007）「福井県体操協会六十年史」
- Crompton, J. L., & Hensarling, D. M. (1978). Some suggested implications of the product life cycle for public recreation and park agency managers. *Leisure Sciences*, 1 (3), 295-307.
- Crompton, J. L., Reid, I., & Uysal, M. (1987). Empirical identification of product life cycle patterns in the delivery of municipal park and recreation services. *Journal of Park and Recreation Administration*, 5 (1), 17-34.
- クロンプトン・ジョン，ラム・チャールズ，原田宗彦（訳）（1991）「公共サービスのマーケティング」，遊時創造。
- 原田宗彦（2002）「スポーツイベントの経済学：メガイメントとホームチームが都市を変える」，平凡社。
- 前田博子（1990）「地域住民へのスポーツ振興に関する事例研究－樋脇町のフィールドホッケーについて－」*鹿屋体育大学学術研究紀要*，21：23－30。
- 文部省（1961）スポーツ振興法，<http://law.e-gov.go.jp/haishi/S36HO141.html>。（2016年9月28日閲覧可能）。
- 文部科学省（2001）スポーツ振興基本計画，文部科学省ホームページ，http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/plan/06031014.htm（2016年9月28日閲覧可能）。
- 文部科学省（2010）スポーツ立国戦略，文部科学省ホームページ，http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/rikkoku/1297182.htm（2016年9月28日閲覧可能）。
- 文部科学省（2011）地域スポーツとトップスポーツの好循環推進プロジェクト事業，文部科学省ホームページ，http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/1319699.htm（2016年9月28日閲覧可能）。
- 文部科学省（2011）スポーツ基本法，文部科学省ホームページ，http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/index.htm（2016年9月28日閲覧可能）。
- 文部科学省（2011）スポーツ基本計画，文部科学省ホームページ，http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/plan/（2016年9月28日閲覧可能）。
- 鯖江市（2016）「鯖江市まち・ひと・しごと創生総合戦略」，鯖江市ホームページ，<https://www.city.sabae.fukui.jp/bin/017228-10-1.pdf>（2016年9月28日閲覧可能）。
- 鯖江市（2010）鯖江市民者約条例，鯖江市ホームページ，http://www5.city.sabae.fukui.jp/reiki/reiki_honbun/r400RG00000618.html（2016年9月28日閲覧可能）
- 高松祥平，高橋豪仁，山口泰雄（2013）「奈良県における総合型地域スポーツクラブ育成に関する一考察」，*神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要*，6（2）：11－18。
- 佐伯年詩雄（2006）「スポーツ政策の歴史と現在——戦後スポーツ

政策の「これまで、今、これから」を考える（特集スポーツの経営戦略を問う），創文企画，現代スポーツ評論，15：36－48.

SSF 笹川スポーツ財団（2014），「スポーツ白書～スポーツの使命と可能性～」.

ルイス・ウェルズ，柳原範夫，原正治，中園史彦（共訳）（1976）「国際貿易と国際経営—プロダクト・ライフ・サイクルと国際貿易—」，嵯峨野書院.

山田耕生（2009）「プロサッカークラブの本拠地におけるサッカーのまちづくり——浦和レッズとさいたま市浦和地域の事例」共栄大学研究論集，7：107－121.

山口泰雄，野川春夫，永松昌樹（1996）「スポーツ都市づくりと地域振興に関する研究」，平成7年度文部省科学研究費研究成果報告書，神戸大学.

山口泰雄（2000）「生涯スポーツとイベントの社会学—スポーツによるまちおこし—」，創文企画.

山口泰雄（2004）「スポーツボランティアへの招待—新しいスポーツ文化の可能性」，世界思想社.

山口泰雄（2012）「全国に広がる参加型スポーツイベント」，都市問題，103（7）.

山口泰雄（2010）「プログラム・ライフサイクル分析による成長戦略」，健康づくり，388：12－15.